

EYES 3

Amika & Michael

佐野光音

Hikarune Sano

eternity



エタニティ文庫

《夏休みの終わりに。高橋阿見香のあらすじ的な脳内日記》

『事実は小説より奇なり』この名言を最初に思いついた人って、天才だと思う。

十七歳の誕生日にミカエルと出会ってから二ヶ月と十三日目の今日まで、あたしの毎日は竜巻と台風をこつた煮にしたような日々だった。憧れていた檀君と両想いになれて幸せのはずが、傲岸不遜で傍若無人、極悪非道の超俺様王子・ミカエルに振り回され、「頼むからいっぺん死んでくれ」と何度願ったことか。こんな男が許婚だなんて、あたしの人生は呪われている。ちよつとずつ彼のことを知るにつれ、「コイツ最低！」って感情も、微妙に和らいではいるけれど、優しさも紳士っぷりも檀君と比べたら雲泥の差。あたしの心の中では、檀君VVV永久に越えられない壁Vミカエルなわけで、定められた婚約が解消になるのを心待ちにしつつ、多事多難の夏休みが終わろうとしていた。

休み中はイギリスに滞在して、初めて会う祖母や親戚その他大勢と過ごした。一言で表すと、祖母もイトコもハトコも変わり者揃い。根はいい人たちばかりだし（そうじゃない要注意人物もいる。ミカエル含む）世界に君臨する一族だけあって頭脳も容姿も超

一流だけど、平々凡々な高校生のあたしからするとついていけないというのが本音。壮麗で巨大な宮殿も、ひとこと他人事ならば映画みたいと笑える。オートクチュールのドレスもダイヤのジュエリーも素敵だけれど、あたしには似合わない。ミカエルにキスをされた薔薇の園も、危うく一線を越えそうになった天上の樂園エデンのような美しい温室も、あたしが求めている世界じゃない。

六畳二間のアパートでお母さんと楽しく暮らして、親友の文月ふづきとまったり過ごして、寝っ転がって手を伸ばせばテレビのリモコンとお菓子がある、そういう生活が恋しい。将来は何になりたいとか、大きな夢や目標もなかった自分だけれど、普通に働いて、大切な人たちと平和に暮らせればそれでもいいと思っていた。

ミカエルの花嫁なんてガラじゃない。美貌もなく取り柄もない、向上心も野心も持たないあたしでは、彼の足手まといになるだけ。二人を繋いでいるのは、掟おきてという拘束力だけなのだ。あたしが花嫁候補の権利を失えば、話すこともかなわない天上人と一般人に戻り、別々の道を生きていく。一日も早くそうなればいいと願っているのに、会えなくなる未来を思うと、心にぽっかり穴が開いてしまいそうな気もしている。目まぐるしかった夏が過ぎ去る、寂しさのせいかもしれないけれど。

一章 スイートベリーの香る夜——(1)

あたし、高橋阿見香は、本日生まれて初めて告られました。といっても、檀君に玉碎した後に逆告白されたこともカウントすれば、二度目ですが。

顔も知らない三年の先輩に、「ずっと好きだった」と言われ、ぼかん気味です。ずっとって、いつからですか？ と素朴な疑問に頭が占領されること数分。あたしは今日まで、その先輩の名前も顔も知らなかったわけで。ていうか、始業式の翌日早々、いったい何事ですか!? 状態です。せめて学校生活は平穩無事に過ごさせてくださいと、夏休みの終わる夜に神様とお星様に祈り倒したハズなんです。二日後にはこの展開。

人生十七年にして、あたしは悟りました。神様は、この世にいない。
いたとしたら、あたしは絶対、神様の暇つぶしに遊ばれているとしか思えない！

この学校では、「愛の告白は体育館裏で」が定番になっているらしい。あたしは知らないで檀君をそこに呼び出したのだけ——親友の文月の前でどこにしようかと大騒ぎしていたら、「体育館裏でいいんじゃない？」と提案してくれたのでその通りにした

までで、今から思うと文月はこの学校の定番を知っていたのだろう。で、あたしは、二期が始まった二日目の朝、下駄箱で待ち構えていた初対面の男子にそこへ呼び出された。「自分、安西政彦あんざいまさひこと言います。放課後に体育館裏まで来てください」と言われたので、これは俗に言うカツアゲか!? とビビって文月に相談したのに、返ってきた言葉は「バツカじゃないの」の一言。

「だって、三年の先輩だよ!? けっこう、ガタイのしつかりした応援団系のコワモテでさ」「後輩をカツアゲする人間が、自分の名前を名乗ると思う? しかもフルネームで」「されたことないもん、知らないよ」と、こっちはオロオロと相談してるのに、文月はあからさまにあたしを小バカにした態度で鼻を鳴らすばかり。

「あんた、そのノリで、その話を檀や大天使サマにするんじゃないよ?」

「なんで? 檀君には言おうと思ってたけど」

「……………。変わったのは見てくれだけか。ま、それでこそ阿見香だけど」

見てくれ? なにが? と眉を寄せれば、文月は呆れた顔のままであたしを見上げた。

「昨日の、教室や体育館での騒ぎを知らないの? 高橋阿見香に何が起こったか」

「ああ。休み明けでみんな騒いでたよね。あたしのことなんか言ってたっけ?」

文月の机に寄りかかって昨日の様子を思い浮かべても、心当たりはない。

「騒ぎの元凶。夏休み前までは、手入れなんてしてないのが丸分かりの頭でいたのが、

一流サロンで整えたような髪型で現れたのも大きいかもね。女は髪で変わるの典型だわ」

「髪型? ボブカットほどの日本人にも無難に似合うって、美容師さんも言ってたけど」

「頭の形が良くて首が長ければ、知的で・可愛く・色っぽくと三拍子も四拍子も揃って、男にはたまらないでしょ。女の私でも見入るもの。あんた素材は悪くないほうだし、それなりにオシャレに気を遣うカツコになったら、そりゃ注目浴びるって。また背伸びた?」

文月の言葉をナゾナゾみたいに聞きながら、最後の質問だけは理解して頷いた。

「四月のときより三センチ伸びた。百七十一。文月は?」

「百五十八。ったく、あんたの隣にいと自分がチビになった気分になる。身長以外にも、睫毛まげまでくつきり長くなってるのはなんで?」

「これ? シヤラが強引に勧めてきたエステで、担当のエステイシヤンから睫毛の長さも足しておきましょうねって勝手にされたのよ。薬の育毛じゃ時間かかるからって。学校にバレたらまずいって言ったのに、聞きやしないの」

「シヤラ?」

「言わなかった? 大天使サマの妹。双子の」

加えて、元恋人。と、心の中で付け加える。

「へえ。双子の妹なんかいるんだ。超美人?」

「超美人なんてもんじゃないよ。歴代のミス・インターナショナル顔負けレベル」

「だろうね。で、あんた、やっぱりエステもやってんだ。腕も足もスベスベなのは全身脱毛？」

「ドレス着る時に見栄えがしないからって、これも強引に」

言いながら、自然に顔がしかめっ面になってくる。渡英前から、まな板の鯉みたいにあれこれされたことを思い出してまたうんざりしてきた。シヤラといいミカエルといい、あの家に居るとみんなして強引にあたしを改造してくる。いろいろやってもらい勉強もさせてもらって、感謝しないとイケないんだらうけど、素直にありがたい気持ちにはなれない。

「ドレスねえ。さすが金持ち。私は事情知ってるからあんたの化けつぶりも納得できるけど、学校の皆さんはそうじゃないみたいよ？ あんたが突然キレイになったって、もっぱらの評判。高橋さんは夏休み中に全身整形したって一部の女子がウワサ流してる」

「はあ？ 全身整形？ そんな痛そうなおもったことも思わなけれど」

「休み中、なんか体も鍛えてた？」

「鍛えてたっていうか。護身術とか、乗馬とか……後はエクササイズとか」

机に寄りかかるあたしを上から下まで眺めていた文月がかぶりを振る。質問攻めにしているわりに、涼しげな一重瞼にはクールさが漂い、干渉を楽しんでいる様子はない。

「女は化けるって言うけど、あんたは短期間で化けすぎ。胸は残念でも健康的なスタイルで髪も肌もツヤツヤ、雰囲気までお嬢風になれば、目鼻立ちに変化なくても美人に見

える」

「さつきから話が頭にはまらないんだけど。綺麗も美人もあたしからは遠い誉め言葉なのはよく分かっているから。肌と髪の調子がいいのはあの家の食事のせいもあるよ。今日の朝食は中華風とか言って、朝からフカヒレのお粥出してくんのよ？ 燕の巣とかさ。食べ物の影響って大きいんだって感心したわよ。この一ヶ月、ニキビさえ出来ないんだもの」

ストレスは溜まりまくっているはずなのに。

「食べ物か。それはあるかもね。それで、放課後は行くって返事したの？ 三年の安西って、聞いたことあるなあ。弓道の都大会で優勝して、全国大会でも準優勝した人じゃない？」

「知らない。怖いから頷いといたけど、同一人物ならなおさら怖いよ。矢でも向けられてカツアゲされたらどうしよう」

「あんたね……。途中まではついてってあげるけど、しつかり断んなよ？」

なにを？ と、訊き返した答えは、放課後の体育館裏で知らされた。

「ずっと好きでした。付き合ってください」

コワモテの三年の先輩にそう告げられて、あたしはぼかん。なんだっけ……。そう、この先輩。「ふううじこちゃんー」のせりふと、主人公がお決まりで女に袖にされてる

怪盗なんかのアニメに出てくる、いつも着物きた人に似てるのよ。いかつい黒眉と日本男児そのものの顔立ちが。味のある顔っていうの？ 見ようによっては渋めのいい男だけ……

文月もわかってたなら、言ってくれりゃあいいのに。そうすればこっちだって、ココロの準備ってもんができたのに！ しかもずっとって言われても、あたし、この人のこと今日まで知らなかったし。

……困った……。」「ずっと……って、あの……」と、ようやく、しどろもどろで口を開いたあたしへ、彼は応援団長のような仕事で背筋を伸ばして臆面もなく言った。

「球技大会の時に孤軍奮闘していた高橋さんに、自分、惚れました。ひと月ぶりに姿を見たら、サナギが蝶になったみたいな高橋さんがいて、気持ちを抑えきれなくなっただです」

サナギからガチョウ？ じゃなくて、サナギが蝶？ 昆虫か、あたしは。なんてテンパって思考が迷走してるけど。球技大会の孤軍奮闘って、それはけつこう最近では？

「高橋さん。ミカエルとかいう外人と、付き合ってるんですか？」

「……いえ。それはありません」

この人にも、球技大会のときのキスシーン、ばっちり見られてたわけね……。明言したあたしに、コワモテの彼が、子供のようにあどけない顔になって微笑んだ。

渋めの表情から、一気に相好そごうを崩すその変化に、目を丸くするあたし。檀君やミカエルとは違う男の人の魅力を見せられて、男の子、というか男性って不思議だなあと、青春の大舞台的な状況でほんやりと眺めてしまふ。と同時に、「しつかり断んなよ」と文月に刺された釘で、心臓がズキズキと痛んでくる。いい人そうに見えるのに、断るのが、申し訳なくて。かと言って、付き合うのは無理だし。完全にフリーでも、付き合うかと問われれば、「お友達でお願いします」の返事が精一杯の心情なわけで。

「ごめんなさい。あたし……付き合っている人が」

あどけなかつた表情が、瞬時にコワモテに戻る。

そのコワモテ、怖いからやめて！ と口から飛び出しかけて、ゴクンと唾つばを呑むあたし。「やっぱり、ウワサは本当だったんですか。ミカエルって外人と、檀聖ひじりって男子を両天秤にかけて、檀って方を選んだって」

「——ぶふッ」

むせてるのか、笑いにならない噴き出しなのかハッキリしない音が自分の喉から放たれ、あたしは両手で口元を押さえた。ダレよ、そんなこと言ってるヤツは——!? なんでもう、檀君のことまでバレてるの？ 学校では今までどおり振る舞おうねって檀君とは約束してたのに、早々にウワサになってるのはなぜ!?

「どうして、檀君のこと……」

否定することも忘れて訊くと、コワモテの先輩がしょんぼりと肩を落とした。

それがあまりにも可哀相に見えて、「そこで落ち込まないで！」なんて励ましたくなくなってしまう。コワモテからあどけなく。あどけなくからコワモテへ。コワモテからしょんぼりと。忙しい人だけど、見ていて飽きない。ハンサムとは違う、っていうと失礼だけど、純朴そのものの人間の味わいが伝わってくる。……っていうか、あたし、好き嫌いとは別として、男になびきやすい？ 今日まで自覚がなかったけれど。今は全然、惚れてはいなくても、真剣に向き合われると、いいなと思えるところが目につきやすいっていうか。こつちも真剣に向き合わなきゃって、マジメに相手を観察しちゃうっていうか。「原宿の露店で、二人がペンダント買ってるのを見た女子がいて、昨日からウワサになってるんです。外人ほどじゃないですけど、檀ってほうも、三年の女子に人気があるんで」

——そうだったの？ 檀君って、三年の先輩方にまで人氣があったんだ……じゃなくて。それは今は、おいといて。また、ウワサ。しかも壁に耳アリ障子に目アリで、捏造話ばかりじゃなく、ホントの話までこうもあっさり広がっているとは。夏休みの原宿に、同じ学校の生徒がいるかもしれないなんて考えなかったあたしが、マヌケすぎなの？

返答に窮していたら、「自分、ショックです」と言いながら、男泣きされてしまった。叱られて、我慢できずに泣いちゃった小学生みたいに。……あの……待って。告られて、目の前で男の人に泣かれるって、アリなの？ 文月から借りた少女漫画でも、読んだこ

とがないシチュエーションのような。いや、あったかもしれないけど、どーすりやいいのよ、こういうときって!! 気弱なあたしでさえ、檀君に断られたとき、目の前で泣かなかつたのに！ ショックのあまり重いカバンでぶっ叩きはしたものの。

おいおい泣き続ける初対面の先輩に困りきってしまった、「あ、んざい……先輩？」と、しょぼくれた肩に恐る恐る手を置いて慰めようとしたとき。「安西先輩！」と辺りに響く声に手を止めて振り向けば、そこに文月がいた。ここまで来ていたとは思わなかったのでびっくりしているあたしを、文月が怒った目で睨んでくる。

「この子、付き合ってる人いるんで。そういうことなんで諦めて下さい。行くよ、阿見香！」言うだけ言い、有無も言わずにあたしの腕をグイグイ引っ張り引きずっていく文月。「待って！ 文月っ。あんな断り方したら、ちょっと」

「あんなもこんなもないの、あれで！ しっかり断れって言ったでしょ？ 人の忠告聞きなさいよッ！ それともなに、二股三股かけたかったんなら話は別だけど!？」

「心配して、様子見ててくれたの?」

「近場で様子見てたのは、ストーカーのあんたの旦那」

「ストーカーの、旦那……? ミカエルがいたの!？」

「火事だのプランター激突未遂だの、ゴタゴタの絶えないあんなの見張り役でしょ。あんながあんの男の存在を忘れてどうすんのさ。通路まであんなについて行った後、そこで

待ってた私の所まで来て、あのバカ女をどうにかしてくれ。放っておけば一週間はあそこまでまごついているって旦那に頼まれたの。ほんっと同感。ここまでアホな女だとは」
 そういえば、そういう男だったということも、夏休みを挟んだおかげですっかり忘れていましたとも。なんで見られたくないことを、人の弱みを握るように逐一把握するわけ？ SPに学校まで張り込ませてるんだから、いちいちつけ回さなくていいのに。

「でも、可哀相になっちゃって」

「可哀相になってあんたは付き合つてやれるの？ はっきり断るのが相手のためだしよ！」

怒鳴りながら、あたしが預けていたカバンを、ドカリと胸へ押し付けてくる。

「阿見香、この際だからキツチリ言っとく。その根がお人よしな性格、今のうちに自覚して改めな。じゃないと、そのうち自分をボロボロにするよ」

裏門から通りを隔てた住宅地のそばに、ミカエルの家の白いベンツが停まっていた。

登下校は車ですると決められたので従うしかなく、車まで歩いていくと、控えていた運転手がサッとドアを開けてくれた。「お帰りなさいませ」と一礼して出迎えられ、引き返り笑いを返して車に乗り込んだら、先にいたミカエルが後部座席でパソコンを広げている。あたしのプライバシーを盗み見していたくせに、素知らぬ顔でこちらを見向きも

しない。

「お待たせしました」と、皮肉を込めて言っても聞こえないふりをされるのは、大喧嘩が続いているせいだ。今日も一日、教室の隣の席で、ミカエルはあたしを見なかつた。

冷たい横顔は、一昨日からそのままだ。ミカエルの花嫁候補筆頭のあたしの命を狙う人間がいるため、学校に行く、行かないで、一昨日からモメにモメていたから。「あたしは行くけど、ついてこないでいい」って言ってるのに、「君が行くなら俺も行くしかない」の平行線で。

「絶対に行くと言いつ張るのは分かっていたが、もう行くのはやめてくれ。勉強なら家でカリキュラムをこなした方がはるかに効率がいい」と繰り返し言われ、あたしも、「学校は絶対にやめない。学校で過ごすフツの生活まで、あたしから取り上げないで！」と、そのたびに怒鳴り返すしかなかった。ミカエルと会う前のあたしに聞かせてやりたいうセリフ、見せてやりたい根性だわ。勉強嫌いだし、学校に行くのなんかウンザリって、朝が来るたびに思っていた自分に。文月と遊ぶのと、高校に入ってから檀君の顔を見るのが楽しみで行ってたのよね。いまの理由も大して変わらないけど。

「あんたは仕事が忙しいんだから、来なくていいわよ」って、ミカエルに言っても、彼は引かなかつた。授業始めの今日は、ノート型のパソコンを用意してきて、「PCをノート代わりに授業を受ける」という名目で授業中はパソコンを、体育の時は携帯モバイルをいじ

っていた。今学期は席替えをしないという大鳴先生の宣言により、あたしの左隣はミカエル、右隣は檀君のままで、休み時間にさすがの檀君もぼそりとあたしに言う始末。「あの男、学校に何しに来てんだろ？ イヤフォンまでつけて、ずっとキーボード叩いてたし。おかしくないか？」

あたしはそれに、「不可解な宇宙人だから、干渉はしない」と、答えていた。不可解というのは嘘じゃないし、干渉したくないのも本音だ。檀君は一学期の終業式の後で、ミカエルの家に意識不明の自分がお世話になったとは知っていたので、昨日、本人にちゃんとお礼も伝えていたのに、ミカエルはそれを無視していた。「世話になつて何だけど、あの男は苦手だ」とぼやく檀君に、あたしは何も言えなかった。それでなくても一学期から犬猿の仲の二人で、間に座っているだけで頭が総白髪になりそうな心境なのだ。

ベンツのゆったりとしたシートに体を預けて、あたしは知らず溜息をついていた。

従兄妹同士で、家の仕来りにより定められた血族婚の相手。相性が最悪のあたしとミカエルは、出会った瞬間から衝突して、反発が絶えない関係だ。それでも一緒にいれば、ミカエルの心の内というか、面倒な性格や意外と繊細で感受性が強いことについても、嫌でもわかつてくる。機嫌が悪い時は、プライベートでは口をきこうとしない。気に入らない時は徹底無視して、バリアを張ってしまう。子供っぽいというより、疲れる感情

や干渉を手つ取り早く自分の中から追い出す手段なのだと思う。考えなければならぬことが山積しているから、足手まといになるものを一旦切り離して完全にシャットアウトしないと、物事がこなしきれないのだ。仕事をしている時のミカエルの集中力は、半端じゃない。数秒で、どれだけのことを判断しているのだろうと思うと、想像するだけであたしのほうが気絶しそうになる。今日も教室でパソコンに向かっている彼をそっと眺めたりしていたけど、張り詰めた鋭いオーラを漂わせながら、ちらりとも画面から目を離さなかった。

休み時間だけはパソコンを閉じて、取り囲んでくる女の子たちが無駄口をたたく様子を、ミカエルは頬杖をついて眺めていた。無関心そうに。けど、頭の良さと、身につけてきた会話のマナーで、要所要所で話題を適当に振ってあしらうから、誰もミカエルの無関心に気づいていない。奴の性格を把握していれば「くだらない話してんなよ」と小バカにしているとしか見ええないのに、盲目的にはしゃいでいる彼女たちには悟られていないのだ。

「ミカエル。忙しいんでしょ？ 無理じゃなくていいよ」

走行の振動がほとんどない静かな車内で、あたしはミカエルにそう言った。学校にまで来られて鬱陶しい以前に、彼に負担をかけたくない気持ちもある。すると、運転席と後部座席の間がパワーウィンドウの間仕切りで閉じられた。ミカエルがスイッチを押し

たらしい。

「君だけの問題じゃない。学校で何か起これば危険なのは君だけではない。被害は尋常じゃないんだ。退学しろとは言っていない、休学してくれと提案しても君は耳を貸さないが」

今朝のケンカでも言われたそれが、心に重くのしかかる。

「あたしが……学校に行きたいって言うのは、わがままなの？」

「君が悪いとも言っていない。だが、散々な目に遭っても理解が足りず、自分の感情優先で行動したがるのは君の得手勝手だ」

「だから、わがままだって言ってるんでしょ？ あたし学校まで失いたくない。この居場所だけは、守りたいの。休学して、結婚問題が片付いて晴れて学校に戻れても、出席日数が足りなくて留年するかもしれない。あたしは今のクラスがいいの。文月と一緒に卒業したい」

「檀がいるからだろ」

核心を突かれて、ぐうの音も出ずに窓の外を気まぎれに見やる。

「俺は、君に嫌がらせをしたいわけじゃない。状況をわかまえろと説明している。だが、伝わらないようだから、この件に関してはしばらく口をききたくない。よって大目に見てやるから、君も話題にしないでくれ。俺への心配も無用だ」

悪行三昧の嫌がらせをしておきながら、その偉そうな態度はなに？ とケンカを売りたくなったところを我慢して、慇懃無礼な微笑を作ってミカエルを見た。

「大目に見てくださって、どうもありがとう。ご厚意に感謝しています」

「ああ言えばこう言う可愛げのない女に、礼なんか言われても気味が悪い」

口を開けば、あたしたちはケンカになる。ツンと顔をそむけ、右側のウィンドウへ視線を移した。首都高のジャンクションに、流れるように車が吸い込まれていく。こんな高級車で学校に通うようになるなんて、二ヶ月前のあたしに言ったら、どんな顔をするだろう？ まだ明るい外の光を遮るスモークガラスに自分を映して、意味のない問いを投げかけてみる。……でも、少しだけ、こうなってよかったと思うこともある。父の母親、グランマ・アミユカの思いやりで、芙蓉の花で作られたあたしの紋章を、携帯の写真メールでお母さんに送った日。電話の向こうで、お母さんはとても喜んでた。結婚式も婚姻届も認知もないまま、あたしを産んで育ててくれたお母さんの苦勞が少しでも認められて、父の家にお母さんの存在が刻まれていくのなら、それだけはよかったと心から思えるから。

キーボードを操作する手を止めたまま、ミカエルが、あたしの横顔を眺めていた。

イギリスにいたときにも、あったこと……。ミカエルは時々、ミカエルを見ていないあたしを、見つめている。気づいた態度を見せたほうがいいのか、知らないふりを続け

たほうがいいのか、そのたびに迷いながら、あたしは気づかないふりをしている。

翌日の午後は予定が変わり、急遽、企業説明会を兼ねた講演会とやらが体育館で開かれた。卒業後、就職する生徒もいるので、たまにお偉いさんからのこういう話があるのだ。大手食品会社の宣伝部部长が来校して、会社のしくみや自社の説明、働くことの意味などを全校生徒へ語り、解散後に新製品のドリンクが配布された。ポリフェノール&ダイエット効果抜群フルーツ酸入りの、フルーティウオーターという健康飲料で、ラヴモード・ラズベリーとキスタイム・レモンデー、ミステリアス・ドリアンシヨックなんてのもある。

「ネーミングが怪しすぎだけど、なにげに気になるよね。どんな味よ？」って。特にドリアン。モニターとして今日中にアンケートで感想を書けるところも、ちゃっかりしてない？」

文月と言い合うそばで、クラスメイトの大半も同じような話をしていた。

「ちゃっかりだよ。今日中につことは、学校で飲んでいいんだよね？ 開けちゃおう」教室を見回せば、蓋を開けて早くも飲んでいる人たちがいたので、あたしも言いながらペットボトルの蓋を回す。「どうよ？」と、あたしが毒味役とでも言いたげな文月に訊かれ、「ジュースよりさっぱりした水。添加物のない天然素材ってのがいいかも」と

感想を言うと、一口くれと要求されたので、あたしのボトルを文月に渡した。

「そういうや今度の日曜日、雨天延期になってた多摩川の花火大会があるんだって。一緒に行かない？」

飲みながら文月が話しているところへ、檀君がやってきた。

「高橋。次の日曜、花火大会に行かないか？ 夏祭りどこにも一緒に行けなかっただろ」

そばにるのが文月だから、気兼ねなく檀君はそう言い、あたしと文月はグッドタイミングなのかバッドタイミングなのかと苦笑しあってしまった。

「いま、文月にも誘われてたところなの」

「しゃーない。どうぞ、ポイファースト」

あっさり引いてくれた文月に、あたしは「ありがとう」と軽く手を合わせる。

「サンキュ、興田」

「檀。あんた何味ゲットしたの？」

檀君が手にしていた、未開封のペットボトルを目ざとく見やる文月。

「ミステリアス・ドリアンシヨック」

「やっぱ、一番人気。要領良さげだもんね。競争率の高いところをサラッとかつさらう。またクラスの男子に睨まれるんじゃない？」

他意を含んだような文月の言葉に、あたしと檀君は顔を見合わせた。またって、なん

だろう？

「はい、交換。まだ開けてないから。私、それ狙ってたんだよね。安い取引でしょ？」
文月からラヴモード・ラズベリーを差し出され、まいったと苦笑いの檀君は、おとなしくペットボトルを文月と交換していた。

「高橋のは何味？」

「キスタム・レモンデー。飲む？」

何の気なしにボトルを差し出すと、笑って首をふる檀君。

「いや、いい。興田も飲んでたでしょ、それ」

言われてから、「あ」と気づいたあたしに、文月が口端をヒクつかせている。

「どうしてそう鈍いの？」

とっさに判断できる皆のほうがおかしいんだよと言いつ返しても、二人には通じなかった。

「こーゆう女だから。檀、あんた苦労するよ？」

「覚悟してる」

文月と檀君の、阿吽あうんのやり取り。あたしだけ立場が悪いのはなぜだろう？ むくれて自分の席に戻れば、隣のミカエルは持参のミネラルウォーターを飲んでいた。

「貰わなかったの？ フルーティウォーター」

声をかけると、「いらない」と呟つぶやき返される。そこへ、六時限目の授業が始まるうかという間際、あたしの席にさっと来たクラスの男子から「放課後、ちょっといい？」と声をかけられた。一学期の途中まで隣の席だった倉持君だ。

「体育館裏まで、来て欲しいんだけど」

……体育館裏？ なにか、イヤな予感がするんですけど……。たぶん聞こえていただろう、両隣をさりげなくうかがうと、聞こえないふりをしてた。二人とも、不自然に正面を見ている。……カッアゲかな……。カッアゲのほうが、まだあたしの心臓に優しい気がする。

「俺、高橋のこと、ずっと好きだったんだ」

放課後の体育館裏で——あたしは、このときばかりは呆れ返っていた。ずっとって、いつからだよって、このクラスメイトには問い詰めてやりたい。隣に座ってたときは、そんな素振りもまるでなかったじゃんよ。ほとんど喋しゃべらなかつたし、いくら鈍感系と言われるあたしでもそれくらいはわかる。だいたいあんた、一学期にクラス中で知られてたウワサでは、読者モデルの島谷しまたにさんにお熱だったって話なんです？ あたしへのイジメ先導者の。

「檀と付き合ってるってウワサ、まじ？」

「ねえ、倉持君。一学期あたしがイジメにあつてたとき……二、三回、倉持君から足を引つ掛けられた覚えがあるんだけど」

「——いや、それは、違うよ!!」

めいっばい挙動不審に慌ててるけど、どう違うんだよ、こら。人生二度目、いや三度目? の告られステージだつていうのに、胸の前で腕組みしてじつくり話を聞きだしてやりたい気分。告られタイム真っ最中の女子高生の態度とは思えない。

「好きな子に、冷たく意地悪しちゃうつていう、あれだよ。あれ」

アレ、ね。小学生のお子様ならいざ知らず、高校生が足引つ掛けまでやったら、シャレにならなくない? しかも、言い訳になつてないし。済んだことをグチグチ責めたくないけど、こういう手のひらを返した失礼な変わり身をする男は、あたしは嫌いだ。

「あたし、好きな人いるから」

「それつて、檀? ミカエル?」

……どういつもこいつも……

「檀君よ」と、素っ気なく伝える。もうバレてるならいいや。安西先輩の話じゃ三年には知れ渡つているみたいだから、全校生徒に広まるのも時間の問題だろう。

「これからも、クラスメイトでよろしくね」

踵を返して体育館裏を離れてから、どっかで聞いたセリフだと首を傾げて、自分が檀

君に言われたんだつたと思ひ出した。檀君も……あのときは、すごく困つてたんだらうな。

「ちゃんと断れたじゃん。また情にほだされてたら、どうしようかと思つたよ」

ニヤニヤした文月が、体育館の入り口に立つていた。気にして来てくれたらしい。

うんざりして、「ありえないつて」と息をつく。

「今回ばかりは、蹴っ飛ばしてやりたくなつた」

悪態をつくど、噴き出した文月が愉快そうに背中を叩いてきた。

「モテ期到来も大変だね。阿見香嬢」

「——モテ期到来!? これつてそうなの?」

「だつて阿見香、変わったもん。夏休み入つたばかりのときも私、言つたでしょ。あれから更にお嬢っぽくなつたし」

「見た目を手入れされて生活環境が変わつたくらいで、周りの対応つてこんなに豹変するわけ?」

「そういうもんよ。あんた見てて思った。先天的に容姿に恵まれた人間もいるけどさ、教育や生き方で、後天的に身について磨かれていく魅力や綺麗さつても大きいんだなつて」

「あたしについて、生まれつきは残念だつたねつて遠回しに指摘してる?」

「残念でもないけど、素材は悪くない程度の十人並みだつたよね。も少し身長が高くな

れば、パリコレのモデル目指せるかもよ？ 読者モデルの島谷の比じゃないから頑張れば？」

「ハイハイ。煽おたててくれてどうも。で、何をごちそうして欲しいの？」

あたしの切り返しを受け、してやったりな微笑を見せる文月。

「えびファイレオ。三分の約束、一回分が残ったよね？ 忘れたとは言わせない」

……すっかり忘れてたし。夏休み前の約束をよく覚えてるな。がめついというか、しっかりしていると言うべきか。苦笑しながら、そうなんだよねと考えていた。あたしより頼りになる面がたくさんあるから、あたしは無意識に、文月に甘えながら過ごしてきたと思う。

「今日は無理だけど、来週、放課後に時間作るよ。のんびりお茶しよ？」

「ん。一緒に帰れなくなったのは寂しいけど、仕方ないね」

文月がそう漏らしたので、あたしは親友の腕を組んで、裏門までじゃれながら歩いた。気持ち悪いからやめれ！ なんて、見慣れた笑顔にあたしも大笑いして。これからもこんなふうに、この友達と過ごしていくのだろうと思うだけで、温かい気持ちになっていた。

帰宅して制服を着替えて、講義が始まるまで一休みする。侍女のカレンが運んでくれ

た紅茶を飲んでババロアを食べながら、あたし用にあてがわれているノートパソコンでメールをチェックすると、三日ぶりにイギリスにいるハトコのアティからメールが届いていた。しつこく送らないようにジュードから注意されているそうで、アティによれば「毎日送りたいのを我慢している」らしい。「阿見香お姉さま、ツイッターしましよよ。すぐに会話ができるもの。ブレイズやジュードとも」なんて誘われてるけれど、「余裕がなくて」と断っていた。学校に行き、家でのカリキュラムやブレイズから渡されたテキストをこなすだけで、時間も頭もパンパンだ。今日届いたメールを読むと、アティは怒りまくっていた。『ミカエル様ってひどすぎ!! 私^私が日本に入学するのを禁止してるの! うちのルートはもちろん、正規ルートでも入国審査が通らないように手を回して! 花嫁候補筆頭を危険な目に遭わせた罰則で来日は半年禁止。つてお達しが来たのよ!! オニ! サド! アクマ!!』

マンガババロアで咽むせながら、あたしは笑ってしまった。アティの怒りっぷり、暴れっぷりが目に浮かぶように。『あいつは確かにオニでサドでアクマよ』と、同意と慰めのメールを返信していると、携帯にメールが入った。文月からだ。

『あなた、いつイギリスみやげ持ってくんのか? 学校に来るたびに忘れないでよ』

……みやげね。数箱買い込んだクッキーがかさばるから、持って行くのを後回しにしていたんだ。腕時計を確認しつつ、十分程度なら大丈夫かと文月へ電話をする。

「持ち帰りの荷物になるだろうから、何度かに分けたほうがいい？」

二コールで出た文月に提案すると、「何箱買ってくれたの？」と弾む声で尋ねてきた。

「十箱。フォートナム&メイソンの紅茶付き」

「おお。十箱！ 持つべき者は金のある友達。まとめて持ってきてくれてもいいよ」
好きなクッキーを想像してか、嬉々として応じながら文月が続ける。

「ところで、花火大会は浴衣着るの？ おばさんに新調して貰ったって喜んでたもんね」

「着たいけど一人じゃ着れない」

「そりやそうだ。私も着れないや。時間取れるならさ、日曜の昼間うちへ来れば？ お母さんが着付けしてくれるよ、浴衣くらいなら」

「ほんと？ ……でもね、話してなかったんだけど、SPがいるの。その人たちが、個人の家までは入れないから、行かないようにって言われてて」

「SP？ 身辺警護する人？ トラヤに出かけた時はいなかったよね？」

気づかれないようにいたの、と告げたら、絶句気味に唸る声が聞こえた。

「いたんだ…全然わかんなかった。別に、うちなら入ってもいいけどさ」

「まじ？ いいの？」

「って言わなきゃ、あんた二度とうちに来れなさそうじゃん。そんなとき、私のクッキーと紅茶も持ってきてよ」

苦笑が響いてきて、あたしも「みやげかよ」とツッコミながら苦笑を返す。

それから、あたしの環境が変わっても気負わずにありのまままで接してくれる文月へ、なんとなくありがとを伝えなくなった。気恥ずかしいから、言えないけれど。

電話を切って時計を見ると、既に時間がオーバーしていて、あたしは慌てて学習室に使っている部屋へ駆け込んだ。腕組みで仁王立ちしているシヤラに「三分の遅刻よ」と出迎えられ、顔はにっこりしてるのに異様な迫力がある彼女に疎みあがつてしまう。

「時間厳守。これは最低限のマナーよ。少々遅刻するのが礼儀のフランス式が、阿見香の性には合っているみたいね？」

皮肉を言われても、肩身狭くうな垂れるしかない。カリキュラムの遅刻常習犯になっている自覚はあるわけで。

「今日は、世界経済と英語、夕食後にマナーと数学、世界史も少し進めましょうか」

「……お願いします」

「経済は一昨日の復習からよ。プリントを出すから十分以内に解答して。三割間違えたら、日曜日のお出かけは中止」

「え!? 花火大会？ 行っていいって言ったじゃない！ ミカエルだって」

「兄は兄。私は私。カリキュラムの指導は私が責任者だから、私の方針に従ってもらうわ」
オニツ、サドツ、アクマ!! 勉強以外では優しいのに、やっぱり鬼の妹は鬼だわ、と

口の中で毒づく。この家であたしが遠慮なく悪態をつけるのは、ミカエルに対してだけだ。「思っていたより、英語以外の進行が遅れてるのよ。もうちょっと頑張ってもらわないと」それは、たぶん、つまり、あたしの呑み込みが悪いってことを言いたいのよね？

「ねえ。阿見香。あなたの今後がどうなるとしても、しっかりお勉強するのは、あなたのマイナスにはならないのよ。私もあなたの友人として、身内として、あなたが生きていくのに必要な基盤を作るお手伝いがしたいの。真剣にそう思っているのを分かってくれる？」

真面目な面持ちで切々と語られると、姿勢を正して「ハイ」と答えるしかない。

「よかったわ。今日からカリキュラムの時間、少し増やそうかと思っただけでもいいかしら」え!? まだ増やすの!? 口がひとりでに縦長に歪んでいくのを、止められないんです

が。「私も無理強いはしたくないのよ。ミカエルの花嫁になるならば、私も身近にいて手助けができるけれど。もし花嫁の権利を失くして一族を破門されて、あなたを世の中に一人で放り出すことになったらと思うと、私、いてもたってもいられなくて」

先刻までの迫力はどこへやら、泣き出しそうになっているシヤラに、「やります、やります。あたし、頑張るっ」

条件反射で叫んだら、彼女はニッコリと微笑した。

「そう言ってくれて、嬉しいわ」

……あたし、もしかして、完全にシヤラの手のひらで踊らされてるんじゃないかなろうか。この一族の間が、あたしより一枚二枚どころか百枚二百枚ウテなのは、明白だし。

どことなく楽しみにプリントを差し出して手元のタイマーを押すシヤラを、恨めしい思いで眺める。くつきりと刻まれた二重の瞼が伏せがちになると、南国の海の浅瀬に似たアクアグリーンの瞳に悩ましげな影が落ちて、それがなんとも色つぼく、同性のあたしでも見入ってしまう。秀でた額から滑らかに流れる上品な高さの鼻梁も、常に微笑みがちな表情が優美さを醸し出しているから、ツンと冷たく見えない。

エステで足さなくてもバサバサに長い金茶色のまつ毛とか、切りっぱなしでもサマになるふわふわの髪とか。ルージュをひかなくても魅惑的なアプリコット色の、ふっくらとした唇とか。シミ一つない雪花石膏のような肌とか。長い手足。九頭身の体。胸もけっこう大きいし。桜の花びら色の爪先まで完璧に整っていて、何から何まで美女の鏡。

世界中の才色兼備の女性たちでピラミッドを作ったら、間違いなくトップに君臨できそう。お嬢様学校で寮生活していた頃のバースデーに、子供から大人まで、数百人の男が列を成したって逸話も「当然だよ」って頷ける。自分と血の繋がりのある従姉とは信じ難いし。

……あのアプリコットの唇で、何回くらいミカエルとキスしたのかな。なんて、考え

てしまうあたしは、下品だろうか……。キスだけじゃなくて、どこまでの関係だったのかな、とか。兄妹だと知らなかった時は、健康で健全な恋人同士だったわけで、きつとイロイロあったに違いない。イロイロと……。相手は、あの、ミカエルだし。いや、女に手が早くなつたのは、手痛い失恋が原因？ 生来のものだったら、やっぱり刑務所におち込むレベルなわけ。

「阿見香？ 二分経ってるわよ。あと八分。どうかしたの？」

ペンすらも手にしていないあたしを、怪訝けげんそうに見つめてくる。

頬杖をつき、「シヤラの唇、おいしそうだなあつて思つて」と、ほんやりと口を滑らせたら、シヤラが手にしていたストップウォッチを派手に落とした。気が動転してる顔で目をまん丸にされても、あたしは我に返るどころか、ぼけらと彼女に見入るばかり。

「なにか……。アテイアナに感化された？」

「アテイ？ ううん。キスしたいとまでは思わないよ、もちろん。ただ、シヤラとキスできる男の人つて、超幸せだろうなつて思つて」

眉を寄せてあたしを眺めながら、自分の正気を保つようにシヤラが首を振る。

「イギリスに出かけていた疲れが残つているのかもしれないわね。体調はだいじょうぶ？ ミカエルに診察してもらいますしょうか？ 彼、一応医者だから」

「なんでミカエル？ ダンジズだつてそうなんでしょ？」

「ダンジズにあなたを触診させたら、ミカエルになつて言われるか……」

困つた様子で、それは無理よ、と呟つぶやいている。

「なんで？」

「なんで、つて……。婚約者ですもの」

明らかにたじろいでいるシヤラを眺めて、ああ、そうかと思う。

自分の婚約者のダンジズに、他の女に触つて欲しくない気持ちだが、シヤラにもあるんだ。「ダンジズ舐なんつてわけじゃないから安心して。体調は平気。どこも悪くないよ、学校が始まつて慌ただしいだけ。それにミカエルだけはやめて。診てもらうときはハウスクターがいい」

ミカエルにお医者さんごっこなんかさせたら、なにされるか分からないよ。余計具合が悪くなるつて。前科たつぷりのあの男のこと、診察とほざきながらどんな嫌がらせをしてくるか、想像するだけで動悸どうきがする。想像できてしまうあたしもヤバイけど。

「ミカエルと結婚したら、ハウスクターどころか、女の医者でさえお触り厳禁ね」

ボソリとシヤラが言うので、あたしは「うげえ」と舌を出して見せる。

「それも決まりごと？ 花嫁の掟おきて？ だからあいつ医者資格持つてるんだ、納得。結婚前から一緒に寝室使えとか、同じベッドで寝るとか、すつごい迷惑してるのに。ほんとと面倒くさい家だよ。結婚だけはまじでイヤだわ」

本音を吐き出していたら、天井を仰いだシヤラが、空へ嘆くような溜息を漏らしていた。「曲解の天才って、言われたことなあい?」

「キョツカイノテンサイ?」

シヤラもミカエルも、日本人のあたしでも使わない単語や熟語をチャラっと口にしたりする。あたしはと言えば、何かまた難しいことを言ってるわ程度の棒読みで訊き返して、彼女の美しい唇を見つめていた。別れたって、見るたびにキスしたくなる唇だわ、これは。「……お喋りはこの辺でやめておきましょうか。時間計り直すわね。これから十分よ」
 気を取り直してストツプウォッチを押すので、あたしもやる気が起きないながら、どうにかペンを握りしめ集中しようとして試みる。花火大会のお出かけを懸けられてしまうと、頑張らないわけにはいかない。檀君とラブラブ浴衣デートするんだから。女のあたしまでときめいてしまう魅惑の唇については、しばらく強引に忘れなきヤダメだ。

シヤラからの課題をスレスレでクリアしたその後。シヤワーを浴び、まだ蒸し暑い夜なのでキヤミソールにショートパンツで一息入っていた。暑いといっても、この邸宅は隅々まで温度調整が行き届いているため、どこでも快適で過ごしやすい。足をぶらつかせてベッドに座り、だからだと本を読んでみる。三分の一ほどまで惰性で読み進めたけど、ちっとも頭に残っていないスマクラグドス一族の史書・ライエの書だ。分厚すぎ

てよほどの暇人じゃなきや読まないだろうに、世界中の国立図書館にもあるらしい。やる気なく大きなベッドの天蓋を仰ぎ、幾夜を過ごしても馴染まない豪華なインテリアを見渡す。馴染まなくても寝られるのが、あたしのこだわりのなさと言うべきか、図太いと言うべきか。

あたしの後でシヤワーを済ませて髪を乾かしてきたミカエルへ、「お先にシヤワー、どうも」と居候の心得で礼を言うと、本を手にベッドに横たわりながら返された。

「いちいち気を遣わなくていい」

それから眉をひそめ、「血の匂いがする」と小さく首をふる。

血? 尋ねかけた拍子に心当たりが浮かび、げっ! と青ざめてベッドの隅に寄った。

「嗅覚までバケモノじみてる?」

「まで、バケモノとは、なんだ。血の匂いには敏感なんだ」

「毎月、わかるの……?」

「近くにいれば。裾の短いものはかかると特に。せめて長いものを着てくれないか、一晩中嗅いでると気分が悪くなる」

すぐに長いワンピースのパジャマに着替えたあたしは、気まずい思いでベッドに戻り苦情を添えた。

「血の匂いで気分が悪くなると言うわりには、いつだったか、保健室で襲われたような」

ケンカを売りたい心境じゃないのに、気恥ずかしさで口が勝手に皮肉ってしまう。「あれは、君の血が必要だったから。君の危機を察知するために。血を取り込んでおけば、離れていても分かるんだ。深夜の火事の時も、寝ていた君を起こしたのは俺だ」「また、超能力の話？」

こういう話はまだ拒絶反応が強く出てくるので、あんまり理解したくない。

「シンクロニシティ。心理学者のユングが提唱した、意味のある偶然、誰でも経験する共時性だ。俺の場合は血が関わると、それが起こりやすくなる」

「あの、危険だって呼びかけてきた声は、あなただったの？ 闇の中に見えた瞳も……」「聴覚以外にも、視覚で捉えられる現象もあるだろうな。別に不思議なことじゃない」本を目で追いながら、単なる世間話のように説明される。この人にとっては、オカルトやファンタジーではないのかもしれないけど、あたしには非現実的な事象でしかない。それでも、声が聞こえたのも助かったのも事実なので、「ありがとう」と、今更だけどう伝えたい。かと言って、保健室で襲われた過去は、これっぽっちも帳消しにはならないけど。

……またイヤなこと思い出しちゃったよ。さつさと寝てしまおう。今更のお札に無言でいるミカエルに背を向けて、「おやすみなさい」と言うと、「おやすみ」と返された。毎晩二人で過ごしているのに、「おやすみなさい」を伝えた夜も、伝えられた夜も、

ほとんどなかった気がする。あたしが先に爆睡しているのが常だから。もともと寝つきのいいのが、ここに来てからくたびれる日々のせいで、ベッドに倒れた直後から意識がない夜が多い。

だから、ぐっすりと寝こけている夜更けに、唇になにかの感触があっても起きるところか疑問に思うこともなく、枕を抱えてご機嫌で檀君の夢を見たりしていた。その夜も、相変わらずそうだった。女に手癖の悪すぎる男の隣でのうのうと眠れて、別な男の夢をムフツツと見れるあたしの神経ってどうよ？ と、目が覚めてから反省する朝。事実は小説より奇なり、人生摩訶不思議だけどこんなもんと自分を丸め込み、強引に納得させて、あたしは果たしてこれでいいのだろうか？

「なんで落とせないのよ。檀も檀だよ、気取りやがって。好きならさつさと押し倒せよ」「……ケジメがつくまでは、って。それだけ、大事にしてくれてるの」

強姦スレスレなことをしてきた男とは違うのよ、などと力説しようとして、ぐっと言葉を呑む。それは文月に知られちゃマズイわけで。ミカエルとの秘密のあれこれ、流されまくりの女だと親友に知られるのは嫌だ。いくら文月でもあたしを軽蔑するかもしれないもの。

「大事ねえ。ノロケはいいけど、そんな悠長なこと言っていていいわけ？ 純潔捨てない

と婚約解消にならないんじゃないか？」

日曜日。文月の部屋でお昼を食べながら、久しぶりにまったりした時間を過ごしていた。「グランマが頑張ってくれてるけど、アテイの報告では長老会の意見が分裂してるって」あたしが言うと、「アテイ？ グランマ？ 長老会？」と文月が訊き返す。

「グランマは父方の祖母の愛称で、アテイはハトコの一人。血がとにかく大切な家らしいから、やっぱ簡単には結論が出ないみたい。二言目には血が、血が、血が、血が、ほん」とヘンな一族だよ」

かいつまんで説明すると、

「それだけ伝統と後継が重要なんですよ。ヨーロッパの貴族とか王族も、貴い血を守るために庶民には理解できない努力を長いことしてきてるじゃん。そう考えると、一概にヘンな家とも言えないんじゃない？ 特権階級の家特有つうか。濃い血の子孫を残していくのが最重要課題なのは、別におかしいとは思わないけどね」

カップメンを啜り、文月がもつとらしい意見を述べる。その血そのものが、普通じゃないらしいんだけど、とまでは言わないでおいた。言えないというべきか。

「うまつ。もういっこ食べたい」

夢にまでみたインスタントの味に舌鼓を打ち、あたしは満足して目を細めた。

「一日にカップメン二個はやめとき。体に悪いよ。腹でも壊したら旦那に睨まれそう」

「旦那？ ミカエル？ んなことで睨まないよ。つうか、ダンナって呼ばないで」

「これが呼びやすくてさ。スマクラグドス君なんて舌噛むし、ミカエル君もサマも呼びづらい。ちゃつちゃと降参して旦那決定でいいじゃん。金持ちで将来も安泰で言うことなし！」

「勝手に決定しないで。文月があたしの立場なら引き受けられるの？」

「引き受けるね。大天使サマのあの性格を差し引いても、生涯安泰は魅力的だよ。割り切って寝てやって、子供が無事に生まれたら、後は一生会わないで世界中旅行したり、マンガ図書館建ててそこでのおんびり暮らすわ」

その手があったか。……じゃ、なくて。

「文月ってば。二次元に魂持っていかれて、三次元に興味がなさすぎなもの、問題だよ？」
「誰に迷惑かけてるわけじゃなし。私には私の生き方があんのよ。現実の恋人よりマンガ。きつと将来も結婚よりマンガ。老後も单身マンションでマンガづくしの日々。ああ幸せ。夢中になれるものがあるのが、人間の最高の幸せだと思わない？」

結婚よりマンガ。老後も单身マンションでマンガづくし。あたしにはちつとも理解できない幸せなんだけど。

「あたしは、檀君に夢中だからいいや。グランマに粘って叩いてもらっても、長老会の頭がカチカチのままだったら、どうにかしてバージン捨ててくるよ」

「檀が聖人君子気取りでいるんだったら、最終手段でうちの史郎しろうなんかどうよ？」

ニヤニヤ笑う文月へ、「お兄さん？ いいの？」と真顔になって身を乗り出していった。「そこ、のるとこ？」

「知らない人よりいいよ。あ、でも後腐れなくするんだったら、知ってる人じゃまずい？」

「そこまでして拒否される大天使サマも、気の毒な男」

深い事情を知らずに呆れる文月を尻目に、ずずと音を立ててスープを飲み干すあたし。

「生き返るわあ、この味っ」

「安い舌だねえ。ところで、こういう内輪の話、部屋の外の外のSPに筒抜けでも平気なの？」

文月が心配そうに言うので、あたしは眉を上げてドアを一瞥いちべつしてから息をついた。

「それを心配してたら、檀君とどこにも出かけられない」

文月のお母さんに浴衣ゆかたを着付けてもらい、女三人で騒ぎながらメイクまでした。

「阿見香ちゃん。少し見ない間にほんつとに女っぽくなって、綺麗になったわねえ」

子供の時から知っているおばさんにしみじみとそう言われると、照れくさいけど嬉うれしい。ちよつとは大人になったのかな、なんて。文月から巾着を借り、足が不慣れな履物で痛くなった時用にバンドエイドを貰って、それから近所で待機していたベンツに乗り

込んだ。

待ち合わせ場所の渋谷駅に着くと、先に来ていた檀君があたしを見て目を丸くしている。

「めっちゃめっちゃ可愛い」

健康的で利発に見える黒い瞳まなこの煌きらきと爽やかな微笑を前に、こっちは赤面。帯の苦しさも吹き飛んで、この笑顔を見るためにもつと可愛くなりたいたい！と欲が出てくる。

檀君は、茶系のデニムに黒のトップ、生成りの袖なしシャツを重ね着して、銀のアクセサリーをセンス良く合わせた格好が普段より大人びて見えていた。革紐のペンダントを大小で三つかけているうちの一つに、あたしも浴衣の下に身に着けたお揃いの物があるって、くすぐったい気持ちになる。それだけで着けないのが、檀君のお洒落しゃれで、照れでもあるのかもしれない。

ストレートの短い黒髪がふわっと風に遊ばれて、はらはらと額に落ちて眉にかかるその風情にも超クラクラ。手を伸ばして、髪をクシャクシャしたくなってくる。九十パーのトキメキと、残りの十パーの「かっこよすぎるのも腹が立つのよッ」的な乙女心で。あたしからすれば、そのあたし殺しといいますが、女殺しの微笑のほうか、めっちゃめっちゃの一万倍くらい素敵なんですけど……。隣に並ぶのも緊張しちゃうよ。

田園都市線は浴衣姿の人交じりの混雑で、二子玉川ふたこたまがの駅で降りるとホームから人が溢あふ

れていた。「高橋が迷子にならないように」って、子供扱いしながら檀君が手を繋いでいてくれる。車両通行止めの駅前通りまではスムーズに進めたものの、あまりの人の多さに檀君が音ねを上げた。

「せっかくだからと思つてここまで来たけど、見る場所変えてもいい？ 近くの穴場」
「いいよ。人込み苦手？」

「ここまで多いのはね。出店でなんか食べてからにしようか」

繋いでいた手に、檀君が気づかないように力を込めた。混雑していない所へ行つて、手を離したら、もう一度繋げるきっかけをなくしてしまふそうだから。

「何食べる？」と訊くと、真っ先に「牛タン焼き。串焼き屋がある」と檀君が答える。「お祭りです牛タン？ ヘヴィだね」と仰天するあたし。お祭りといえば、焼きとうもろこしに、リンゴアメに、イカ焼きに、焼きソバがまず定番だと思つた。どれも食べづらくて、デートの今日は泣く泣く却下だけど……。せっかくの唇のグロスも落ちそうなもの。

先に見かけた牛タンを買い、タコ焼きに決めたあたしが檀君と出店前で順番を待つていたとき、「キミ外国人？ ハーフかなんか？」と、一度目が合つてから興味深そうにあたしをチラチラ見ていたタコ焼き屋のおじさんに話しかけられた。

「綺麗な目してるなあ、エキゾチックな子やね。仕事じゃなければナンパしとるわ」

日没間近の陽射しを受けて、瞳が緑に見えているのだろう。この頃は緑の割合が濃く

なつてきていて、以前は真昼の太陽の下じゃないとはつきりと色が変化しなかったのに、体調によつては室内灯でも黒から緑へ変わったたりする。

「ほいよ。浴衣ゆかたの似合う美人さん！」

気安く冗談を言われて、愛想よくタコ焼きを渡された。その露店を離れてから、「混んでるのによく喋るしゃべ的屋テキヤだったな」と、檀君が眩くらく。的屋とは、露天商人のことを言うらしい。檀君の声が心なしかムツとしているように聞こえたので、苦手な人込みで疲れてるのかなと思つた。おもしろいものを食べたら元氣復活するかもと、自分で箸をつける前に「タコ焼きも食べる？」と誘つたら、「うん」と頷うなづかれたので、タコ焼きの一つをお箸で持ち上げてふうふう息を吹きかける。

「待つて。おじさん焼きたてのくれたみたいで熱いから、ちよつと冷ましてからあげる」
「おじさんて言つたら泣くよ？ まだお兄さんだっただろ」

「そうだった？ おじさんにしか見えなかったよ？」

てつきりそうとしか思つてなかったのに、檀君が声を立てておかしそうに笑っている。あたしがタコ焼きを買い終えるまで、食べずに待つてくれた牛タン串を頬張るうちに氣持ちは明るくなったみたいだ。牛タン、かなり好きなかも。夏休みの初めに病院から退院した日、豆腐ステーキを夕食にしたお母さんに、「明日とあさつては焼肉にしてもらおう」なんて文句を言つてたくらいだから、焼肉が大の好物なのだろう。

屋台のものなんか、ミカエルは絶対に食べないよね。と、唐突に浮かんだ姿を焦って打ち消して、なんで急に出てくんのよと落ち着かなくなった。デートの時に思い出したくもない。了解なく心を過るなんて迷惑な男だ。お箸でタコ焼きを半分に割り、どうにか檀君に食べさせてあげることに専念しようとする。人波にもまれながらお箸で食べさせるのはけっこう難しく、二人で共同作業をしていたら、笑いが止まらなくなっていた。

「青ノリとマヨネーズ、つけちゃった」

檀君の唇の端を指で拭い、指についたそれに困って、片手で巾着からティッシュを取り出そうとした隙に、指へと素早く唇が触れた。あまりにも素早かったので、何が起きたかときよんとするあたしへ、いたずらっぽく微笑んでくる。

「間接キス、する？」

「……………」

「高橋？ 固まるなよ」

固まるよ！ この指を、あたしは、どうしたらいいの？

「公衆の面前で、か、からかわないで」

真に受けた反応がツボだったのか、笑いが止まらない檀君。実に楽しそう。……こういうおちよくり方、ほんと、いい性格してる。唇が触れた指を目の前で拭くこともでき

ず、もちろん自分の唇につける勇氣もなく、そのまま握り締めるしかできない。

「キス、しないんだ？」

魅惑の眼差しで見つめられ、あたしは悔しくて、彼を睨んでしまった。

「あとでしとく。指洗ってから」

「生意気」

くしゃくしゃと髪を撫でられて。とつても幸せなような、納得できないような……

「ここ家族と来てた穴場。混雑で抜け出すのに一苦労の所よりゆっくり観れるよ」

檀君に案内された公園は、会場ほどじゃないものの、人だかりができていた。

「今日、カメラ持ってきたから撮っていい？ 一眼レフが好きなんだけど、荷物になるからデジカメで我慢。今度のデートでは持つてこようかな」

「写真好きなんだ？ 知らなかった。星とか、写真とか……ロマンチストだよ」

「バスケやめて暇を持って余してたら、父親が趣味で使ってたカメラをお下がりしてくれたんだ。それがきっかけでたまに一人で撮りに出歩いている。高橋の中では、俺はロマンチスト決定？」

「そうかも。檀君の中でのあたしって、どんな感じ？」

訊いてから、意味深な質問をしてしまったかと面映ゆくなる。

「勝気で天然」

クスクス笑って檀君が答え、勝気と言われたあたしは「またか」とむくれて肩を落とす。

「鈍感なのに繊細で、しっかりしてるのに危なっかしい。両極端かな」

「繊細って初めて言われたかも。そんなに危なっかしい？」

「なんとなく。見ると目が離せなくなる」

目が離せなくなる……なんて。そんな優しい瞳をして、言われたら。

あたし、どんな顔をすればいいのか。

爆音と共に火花が打ち上がり、夜空に七色の花が咲いた。公園に歓声が湧き起こる。

「火花、上がったね」

檀君へ視線を戻すと、彼は空を見上げていなかった。立て続けに夜空を彩る火花を見ずに、あたしを見つめてくる。

「……見ないの？ 火花」

ドキドキと、どうしたんだろう？ って戸惑いで、問い返す声小さくなる。

「火花を見てる高橋の目が、きれいだから」

微笑して、檀君はデジカメのシャッターを切った。傍から聞けばすごく寒い言葉を、何の狙いもなくさらっと言って自然体で笑ってる。それが二の句がつけないほどサマになっってしまうこの人は、何者なの？ あたしの彼氏？ というか、あたしの彼氏で、いいの？

「高橋の困った顔も、けっこう好き。子供と大人の境界線にいる表情が」

……困った顔。デジカメでフォーカスしながら言われ、ようやくしてやられたと気づき、檀君へ思いっきり舌を出していた。カメラにヘン顔が残ったって、かまうもんかつ。何の狙いもなく、じゃないよ。まんまとハメられて困ってましたとも。きつと、きつきのあれ、「指洗ってから」の仕返しなんだわ。

電車が大混雑する前に早めに帰ることになり、公園を出てお喋りしながら駅へと向かう途中、「後ろ振り向かないで」と声を低く強張らせて檀君が言った。

「誰かついてきてる」

緊張した様子で息を潜めてそっと肩を抱かれ、彼につられて歩く速度が増してくる。

下駄で足が痛いとか言っつてられない。耳を澄ませば、後ろからの足音も速くなっている。SPがいるのを思い出し、守ってくれてから大丈夫だよ、と言おうとして、それを言っっちゃマズインだと唇を噛んだ。もしかして、ついてきてるのはSPで、檀君がそれに気づいただけなんじゃないだろうか。そうだと願いたい。また刺客だったら、冗談じゃないよ！

「その民家の庭に入ろう。電気ついてるとこ。それでも通り過ぎないでもし襲ってきたら俺が引き止めるから、高橋は大声で助けを呼んで住人にかくまってもらえ。浮浪者

に襲われたあの時みたいに手出しするなよ」

早口で檀君が言い、背中を押されて民家の庭先へ駆け込むのと同時に、浴衣の袖が掴まれていた。悲鳴を上げかけ、こういう時こそ護身術のワザだよ！と閃いたあたしに、「阿見香！」と、檀君じゃない人の声が重なる。聞き覚えのある女性の声。仰天して、背後にいる人を自分の目で確かめる。

「お母さん!!」

向き合ったあたしとお母さんの口から、「どうしてここにいるの!？」と、大声がハモって響き渡り、泣きそうなのか怒ってるのか判断がつきかねる顔で先に返される。

「どうしてって、マンシヨンの近所だからよ」

マンシヨンの、近所。ミカエルのとこから用意された家の。……そういえば、住所は世田谷だった。まだ一度も来たことがなかったから、この近辺だとは思ってもよらなかった。「浴衣の柄に見覚えがあって、まさかと思いついてきちゃったのよ。あなたにだけはずいぶんと垢抜けちゃってるけど、そっくりだし。でも、見知らぬ男の子と娘が、仲良く一緒にいるはずがないわと目を疑って。嫁に出したも同然の子が」

「おかーさんっ!!」

叫んで間一髪でセリフを遮り、勢いのまま怒鳴り返す。

「脅かさないですよ!! 檀君をびっくりさせちゃったじゃない!! ヘンな人が後つけて

くるって、二人でビビってたんだからっ!!」

「あ、あら、そうだったの? ごめんなさい……」

「ごめんなさいじゃないよ、なんでそうちよこちよこおかしいの!?! 何も知らない檀君にまで、迷惑をかけないでっ」

最後の言葉は、母親の目をジリジリと見据えて念を押しておく。通じてよ! と、必死の懇願を込めて。察したらしい眼差しが、困惑を隠さずにそらされる。それを確かめ、コンビニの買い物袋を提げて突っ立っている母親を、呆気に取られたままの檀君に紹介した。

「あたしのお母さん。いま別々に住んで、こっちにいたのをすっかり忘れてたの」
衝撃からどうにか自分を立ち直らせた檀君が、姿勢を正して頭を下げる。

「はじめまして。高橋さんのクラスメイトの、檀聖といます」

「あ……阿見香の母です」

お母さんもうろたえつつ、バカ丁寧に頭を下げ返す。「じゃあ、これで!」って帰るわけにはいかないものかと、二人の間で冷や汗ダラダラのあたし。顔を上げたお母さんも檀君も、はにかみながら微笑を浮かべあっているけれど。おかーさん……完全に目が泳いでる……

……頭痛がしてきた……。どうしよう? なんて、こうなるの!?!